Osaka University Knowledge Archive

Title	杉浦重剛の留学体験とその後の思想展開
Author(s)	カッソン, ニコラス ジェイムズ
Citation	大阪大学, 2005, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58791
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

氏　　名	カッソン・ニコラス・ジェイムズ
本籍（国籍）	
学位の種類	博士（国際学）
学位記番号	甲 第　５５　号
学位授与年月日	平成１７年９月２８日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当　課程博士
研究科及び専攻	言語社会研究科言語社会専攻
学位論文題目	杉浦重剛の留学体験とその後の思想展開 Sugiura Jugo's Study in Britain and the Subsequent Development of his Thought
論文審査委員	主 査　教 授　森 藤 一 史
	副 査　教 授　奥 西 峻 介
	副 査　教 授　嶋 本 隆 光
	副 査　教 授　尾 上 新太郎
	副 査　大阪大学教授　米 原 謙

論文の内容要旨

本論文は、幼い頃身につけた漢学の素養とイギリスの留学体験によって理学的な考えを身につけた和魂洋才の典型である国粋主義思想家杉浦重剛［すぎうら・じゅうごう］（1855～1924）の研究である。この研究によって明治日本における近代国家確立のために行われた和洋・今昔折衷方法を考察することを目的とする。ちなみに、ここでいう「理学」とは、一般に自然科学を意味するのだが、杉浦の考えでは、すべての社会現象にも物理的な法則にしたがう原因が必ずあると仮定した科学万能的な主張のことである。

序章では、なぜ「明開化」・「富国強兵」という二つのスローガンを掲げた明治時代に日本が近代化に成功し、植民地化を避けることができたのかを考究する。その問題が日本史のなかで、大きな課題となっている。一つの要因は江戸時代の思想界・教育界のベースであった国学・儒学・蘭学が再解釈され、近代化のために再適応されたことである。イギリスへ留学した杉浦が唱える国粋主義とは単なる排他主義ではなく、「国粋保存・外粋輸入」という意味を持っている。彼自身が受けた教育もまたそのパターンを反映する。このように杉浦が帝国時代といわれる19世紀のナショナリズムに従い、欧米の列国を模範にした近代化ではなく、日本的な近代化を唱え、西洋と日本の特長から構築された新しいナショナル・アイデンティティを求めていた。そのため、19世紀の理学的思想の力を借り、儒学が唱える君主の仁政に対する人民の忠孝に基づいた道徳論や国家論を唱え、それを「理学宗」と呼ぶ。

第一章【 Early Education 】では、杉浦の幼少期教育を分析する。教育家となった杉浦が「人物は天より降らず、地より沸かず、教育によるにあらずんば能はざるべし」と後に述べたことから考えて、彼自身が地元の膳所藩で受けた伝統的な「日本固有の儒学」の影響が重要だったと思われる。藩校の遵義堂が易経を重んじた折衷学派の皆川淇園によって創立され、国学・古学・蘭学も教えられた。杉浦の幼少は明治維新前であって尊皇論が流行し、恩師の一人が志士として処刑されたことに深く心を揺さぶられた。またその頃、杉浦が一生尊敬することになった吉田松陰の文書と出合った。一方、蘭学も修めはじめ、その魅力にとりつかれた。そして膳所を離れ、京都で経国済民・経済実践と唱える岩垣月洲の下で勉強した。上述のようなことが杉浦の思想形成に強い影響を

与え、彼自身もそれを認めていた。

第二章【 Kaisei School & the *Ryugaku* System 】では、杉浦の東京への遊学と文部省の新しい国費留学制度を分析する。杉浦は16歳で貢進生、つまり藩の代表者として、東京大学の前身である大学南校（後に開成学校に改名）に派遣された。中央政府の命令に全国から300人もの有望な貢進生が東京に集められた。英語力不足のため、最初杉浦は最下の14組に入れられたが、藩の代表者としての意識が高くて、一回も帰郷することなく努力した結果1組までに上がった。ところで、1868年の五ヵ条の御誓文による「知識を世界に求め、大に皇基を振起すべし」という方針に従い、明治初期に数百人の留学生が欧米諸国に派遣されたが、経済危機のために文部省が当時の国費留学制度の廃棄を決定し、海外で留学中の数百人を帰国させた。その代わりに開成学校の学生から少人数を選抜することにし、1876年の第2期留学生の一人として杉浦が選ばれた。その時点では杉浦たちは藩の代表者というアイデンティティを日本の代表者というアイデンティティに交換した。学生のなかでも杉浦は、その意識が特に高かったようである。

第三章【 Encounter with Victorian Britain 】では、杉浦の西洋との出合いを分析した。1876年に杉浦がイギリスに派遣され、初めて西洋を肉眼で見た。西洋の技術的な進歩に驚いたが、貧富の差や公害をも見て、西洋に対する劣等感を初めて失った。西洋の家族制度の特長を認めながら、男女平等や西洋人の子供に対する態度を批判するようになった。西洋社会にも日本に相応しくないものもあるということがわかった。日本を離れ、日本人としてのアイデンティティを初めて本当の意味で理解し、「私は日本を世界第一流の国にすることを以って自分の任」とすることを決心した。

第四章【 Owens College 】では、マンチェスターのオーエンス・カレッジ（マンチェスター大学の前身）在学時期を中心に杉浦の留学時代の活動を分析する。マンチェスターが産業革命の発祥地であり、杉浦が滞在した頃には大英帝国の産業の中心地となる大都会であった。このような時代背景から、オーエンス・カレッジは当時のオクスフォード・ケンブリッジ大学と違って理学研究を重んじた。杉浦は、名化学者ロスコー［H. E. Roscoe］とショレマー［C. Schorlemmer］両教授の下で研究し、数編の化学論文を発表し、高い評価を受けた。そのときロンドン大使の井上馨に実業家になるよう勧められたが、杉浦は実業に関心を示さず、ショレマーがいう「学問は学問のためにせよ」(science for its own sake) という考えに従うと決める。杉浦の成績はいつも優等であったが、ある試験で２位に落ちたため、日本の代表者としてイギリス人に負けたことを恥と感じてオーエンス・カレッジを辞め、転校することになった。

第五章【 Intellectual Influences 】では、イギリスで受けた思想的な影響を分析する。19世紀に理学の進歩が大変早くて、理学万能と信じられた時代であった。理学に基づいていない知識を信用しないとまで考える人も数多かった。理学者が思想界で高い位置を占めた。当時に杉浦が最も尊敬した「哲学者」も数学者・物理学者ケルヴィン［William Thomson, Lord Kelvin］であった。ドイツ人のショレマー教授がマルクスの親友及び理学顧問で弁証法的唯物論を論じた。進化論の影響力が圧倒的で、理学に興味を持っていない人も生存競争・弱肉強食のような用語を使って様々な分野を分析した。杉浦もダーウィン［C. Darwin］と社会進化論の始祖スペンサー［H. Spencer］

の書物を愛読し、「人事も物理の定則から離れることができない」と考えるようになった。杉浦は理学・進化論と社会・倫理との関係を論じたクリフォード［W. K. Clifford］に感心した。

第六章【 Social Life 】では、杉浦の留学時代の社交を中心に杉浦の日常生活を分析する。日本人の友人たちと学生らしい日常生活を送り、イギリス人の友人とは日本が野蛮な国かどうかなどに関して議論などをした。しかし日本と異なるイギリスの環境や習慣に対処しようとする精神的なストレスや研究に精を出しすぎるという原因で1879年の秋に神経衰弱に落ち入り、イギリス駐在留学生監督が1880年の春に杉浦を帰国させるよう命じた。

第七章【 National Essence 】では、国粋主義を唱え始めた政教社の創立を説明し、その立場を分析する。明治前期は極端な欧化主義の時代であった。列強との条約改正のため、日本政府がその欧化主義を進め、「鹿鳴館時代」と呼ばれた1880年代の半ばがそのピークであった。それに若い知識人が反発して国粋主義、つまり「国粋保存・外粋輸入」を主張する政教社が創立され、雑誌『日本人』が創刊されたが、杉浦がその要であった。その上、後に『日本人』と合併した新聞『日本』の最初の主任でもあった。政教社の立場は、西洋の特長を認め、日本に相応しいものを輸入すべきだが、進化論に従って、日本の風景・歴史などが西洋と異なり、日本人の習慣がその独特な環境に対応して発達してきたものである、というものであった。従って、西洋に適切なものと日本に適切なものが必ず合うとは限らないため、取捨選択が必要だという主張であった。

第八章【 Nationalism 】では、政教社の一員である杉浦のナショナリズムを分析する。政教社のなか、杉浦の「国粋」の定義が保守的であったが、国粋主義は超国家主義と同意語ではない。杉浦は、「余は西洋の長を採りて我の短を補ふと同時に、我の長を長じて我の短を補ふの必要を説く者なり」と主張しており、国学者ではない。むしろ取長補短が日本の歴史的な特徴の一つであると述べている。ヨーロッパ諸国にそれぞれの異なる国粋が存在し、その国民がそれを守るからこそ、日本では国粋主義を唱えるのである、と。したがって「直訳」、つまり考えずに西洋のことを倣うことは表面的なもので真の文明開化ではない。西洋文化の基礎であり、西洋の進歩の原力が理学であるが、それもまた汽車・電報などの意味だけではない。それらが理学の産物にすぎず、数学的・理性的な精神が理学の本当の意味だから、日本に輸入すべきものがそれであると論じる。

第九章【 Morality and Relgion 】では、杉浦の思想の中心となる道徳と宗教との関係を分析する。杉浦は宗教に依存しない道徳的なベースを求めていた。上述のようにビクトリア朝期イギリスでは理学が万能であると考えられており、そのため理学と宗教とは対立状態にあった。理学の進歩によってキリスト教が迷信にすぎないように見られ、宗教の力が衰弱した。宗教にたよらずに社会を支える道徳のベースを求めるのが重要な問題となった。人間関係のあるべき形とは何かという問題を理学的に解決しようとする思想家もいた。留学時代に杉浦はその「ビクトリア朝期の信仰の危機」を体験した。原因が違っていても、日本にも新しい倫理のベースが必要となり、宗教を信用しない杉浦がスペンサーなどに従い、理学と矛盾しない日本独特の市民宗教の追求に励んだ。

第十章【 Scientific Morality 】では、杉浦独得の道徳論「理学宗」を分析する。杉浦は、日本には「敬神は国体の淵源・道徳の根本」という考え方があり、それを理学的に証明するために物理学の根本であるエネルギー保存説を適応した。つまり、日本の神は超自然のものではなくて尊敬されてきた「何時迄光を残す」人物である。現代の立場から見てみると道徳エネルギーなどというのは大変疑わしいことと思われるが、逆説的に、「人間の處世の大道も、物理上の大原則に支配されぬことはない」と考える杉浦にとって、彼が常に信じたことにも原因結果による理学的な説明が必ずあるとまで考えるようになったと思われる。ともかく、杉浦の論理によると2千5百年尊敬されてきた「万世一系」の皇室が日本最大の道徳エネルギーの源であるため、各国の生存競争という世界で「所謂祭政一致の政度は今日に到るまで我国民の団力を固くするの最大元素にして、今日より

以後は外国に対しては益々此組織の必要を感ずるなるべし」ということになる。

第十一章【 Confucian Rationalism 】では、杉浦が二つの対照的な影響を受けた、儒学と理学を分析する。君主の仁に応える人民の忠という杉浦の考えの基礎はもちろん儒学にあるが、どのようにそれを理学開化と調和させようとしたのか。杉浦の幼少期に『易経』が経書のなかでも大変重んじられた。現代では『易経』がただの占いとして扱われているが、江戸時代には『易経』が政治などに関する書物と思われたのである。杉浦の考えでは『易経』もエネルギー保存説とその結果として起こる波動説（つまり陰陽）に基づいた書物でもあった。それに儒学が常識や経験に基づいたコモン・センス・モラリティーであり、『易経』の目的がその経験から得た智恵にしたがうことであるため、経験に基づいた予知を目的する理学と同じなのである。したがって杉浦によれば『易経』における倫理観・国家論は理学的である。

第十二章【 State 】では、「理学宗」を補完する杉浦における国家と進化倫理学を分析する。杉浦は功利論者で、「最大多数の最大幸福」を原理として社会（国家）の幸福と個人の幸福との調和を企図した。要するに、進化の結果として人間は社会的な動物である。そのため、欲求は他者を利しないかぎり、十全にならない。換言すれば「墨子ノ兼愛ハ楊子ノ為我ヨリモ甚シク為我説トナリ」。それから列国との間の生存競争では、国家という同じ精神を持っている一個人の集合による結合体がその人民の幸福を守るためにあるものであり、その存在が国家を構成する人民の結合力に依存するから「其国を愛するは即ち是れ己を愛するの意に出づるもの」と杉浦は結ぶ。

終章では、杉浦の思想を総括する。杉浦の国粋主義は江戸時代の国学の子孫であり、太平戦争期の超国家主義の祖先でもある。しかし政教社の伝統や民族意識を高めようとする立場は排外的・反近代的なものではなくて、むしろ19世紀の西洋における世界観を理解し、それを認めたうえで、近代化とは普遍的ではなく、特殊的なものであるべきだということを意味した。このことは、杉浦の和歌の一つが彼の立場をよく表している、「敷島の大和心を種として　よめや人々異国のふみ」。杉浦と明治日本は欧米からよく学んだが、残念ながら当時の欧米が示した模範があまりよくなかった。折衷主義という方法が必要であったと思われるが、実際に選んだものがある意味で正しかったかもしれない。杉浦の国家主義という仮定に基づいた唯物論ともいえる考え方も、現代の立場から見ると確かに理学的ではないが、それも当時の世界の反映であった。

論文審査の結果の要旨

杉浦重剛（1855-1924）は、一般に、東京英語学校（後に日本中学校と改称）を設立した教育者、政教社を設立し雑誌『日本人』を創刊した国粋主義者、あるいは皇太子・妃時代の昭和天皇・皇后に倫理の講義をした東宮御学問所御用掛として知られている。他方で、一部の化学者によって、杉浦が英文で発表した化学論文の紹介・分析がされている。が、前者の杉浦像と関連づけられているわけではない。

本論文は、杉浦重剛のイギリス・マンチェスター留学に着目し、この留学体験がその後の思想形成に絶大な影響を与えたことを跡づけることによって、両者を統一的に描こうとする意欲的な論文である。すなわち、杉浦は、留学によって西洋の科学思想を身につけ、自然ばかりでなく「人事」（＝社会）にも科学の法則が貫かれていると考え、科学的道徳「理学宗」を構築した。と同時に、杉浦は、日本の近代化は「西洋化」ではなくて日本に

固有な近代化があると考えた。以上のことを踏まえて筆者は、杉浦の国粋主義は単なる排外主義ではなく「国粋保存・外粋輸入」の採長補短論である、と結論づけた。

さて、本論文「杉浦重剛の留学体験とその後の思想展開　Sugiura Jugo's Study in Britain and the Subsequent Development of his Thought」の構成は、次の通りである。

序章［Introduction］
第一章［Early Education］
第二章［Kaisei School & the *Ryugaku* System］
第三章［Encounter with Victorian Britain］
第四章［Owens College］
第五章［Intellectual Influences］
第六章［Social Life］
第七章［National Essence］
第八章［Nationalism］
第九章［Morality and Religion］
第十章［Scientific Morality］
第十一章［Confucian Rationalism］
第十二章［State］
終章［Conclusion］

まず、序章［Introduction］では、なぜ日本だけがアジア諸国のなかで植民地化されないで成功裏に「近代化」したか、という大問題が検討され、ひとつの要因として、筆者は、江戸時代の思想体系（儒学・国学・洋学）が再解釈され「近代化」に適応された点に着目する。筆者によれば、杉浦重剛の思想も、そのような日本的な「近代化」のパターンに適応したものであった。以下、杉浦の思想形成・思想展開が詳細に検討される。

第一章［Early Education］では、杉浦重剛が幼少期に受けた教育が分析される。筆者は、杉浦が学んだ膳所藩藩校「遵義堂」の設立経緯、幕末に膳所藩を取り巻いていた知的潮流、杉浦が師事した諸先生の学統などを、先行研究と杉浦自身の回想を充分に利用して分析し、幼少期の杉浦が、易を含めて日本で発達した儒教を教え込まれたこと、蘭学だけでなく広く洋学に触れたが「尊王攘夷」思想に共感して中断したこと、また一生大きな影響を受けることになった吉田松陰の詩文に接したこと、を明らかにしている。

第二章［Kaisei School & the *Ryugaku* System］では、明治初年の留学制度が財政難のため改革されたことが概観された後、１５才で膳所藩の代表（「貢進生」）として大学南校（後に開成学校と改称）の英語コースに派遣された杉浦が大変な努力の末に新しい文部省の国費留学生（第二期生）に選ばれたこと、が杉浦の回想を利用して復元される。

第三章［Encounter with Victorian Britain］では、杉浦と西洋との出会いが分析される。横浜から船に乗りアメリカ経由でイギリスに留学した杉浦は、道中、機械文明に驚嘆するとともに、外国人家族の言動に違和感を覚えた。そして日本人の代表として勉学に励む決意を新たにしている。ここでも杉浦の回想が上手に使われている。

杉浦が留学したマンチェスターは当時世界第一の工業都市であり、従って同時に学問的にも最先端の都市であった。そこのオーエンス・カレッジは最初で最大の市民の大学であった。以下の叙述は、マンチェスター出身の筆者の面目躍如たるところである。

第四章［Owens College］では、杉浦が留学したオーエンス・カレッジで、当代随一の化学者ロスコー教授とショレマー教授のもとで最先端の化学を研究し、９編の化学論文を学会誌に公表して高い評価を受け「ロンドン化学協会」の会員となったことが分析される。

オーエンス・カレッジ留学時代に杉浦は西洋で最も進んだ化学研究のレベルに到達し、科学的研究方法を身につけていたのであった。このように杉浦を勉学に駆り立てたものは、日本を代表して留学しているというナショナルな誇りであった。その誇りが傷つけられた時杉浦はオーエンス・カレッジを去った。

また杉浦は師事していたショレマー教授の影響で哲学にも関心をもった。第五章［Intellectual Influences］では、１９世紀イギリスで知的主流を占めていた進化論の考え方が紹介される。杉浦もその影響を受け、ダーウィンやスペンサーや T.ハックスリーの書物を愛読し、W.K.クリフォードに共感していたことが明らかにされる。

第六章［Social Life］では、留学時代における杉浦の交友関係（日本人ばかりでなくイギリス人の級友クロスなど）が分析される。注目されるのは、市川兼恭がロスコー教授の著書 *Lessons in Elementary Chemistry* 第二版を翻訳するのを杉浦が手伝ったことである。結局杉浦の留学生活は、勉学による過度のストレスが原因で神経衰弱に罹り１８８０年に終わった。こうして留学体験を通して杉浦の日本的儒教思想に西洋の科学的思想が「接ぎ木」された、と筆者は言う。この章でも筆者は、杉浦の回想を上手に使っている。

第七章［National Essence］では、杉浦が設立にかかわった政教社の国粋主義が分析される。条約改正のために明治前期には極端な「西欧化」が採られた（「鹿鳴館時代」）。それに反撥して、政教社が設立され、国粋主義が提唱された。政教社には、熊田活版所を中心とする第一のグループと、哲学館を中心とする第二のグループがあった。筆者は、杉浦も属する第一のグループの代表として志賀重昂の見解を採り上げて分析する。志賀は、スペンサー流の社会進化論の観点から、国粋を保存しつつ選択的借用を行う日本型近代化を構想した。従って、政教社の国粋主義は幕末の攘夷論のような排外主義ではない。杉浦にとって保存すべき国粋は、皇室と臣民の関係であった。この君臣関係は、君主は臣民に仁を施し、臣民は君に忠をもって従う、という儒教的考え方に基づいていた。

杉浦は、「西洋文明を留学によって養った多くの留学生の中で、逆に国粋主義に基づくナショナリズムに目覚めていった人物の代表格である」と言われるが、彼の国粋観念は戦前の超国家主義に結びつくものであろうか、第八章［Jugo's Nationalism］では、杉浦のナショナリズムが分析される。杉浦の国粋主義は一語にして言えば「国粋保存・外粋輸入」であり、彼が構想する日本型近代化は洋の東西を問わず長所を「取捨折衷」し両者の長所を結合するものであった。このような杉浦の採長補短論は、幕末以来の「和魂洋才」論の系譜に属す、と筆者は言う。ただ杉浦の場合、保存すべき「和魂」は武士道以前から日本に存在する「敬神の情」であり、採用すべき「洋才」は杉浦が留学体験で得た西洋の科学的精神とその応用であった。この点が幕末の「和魂洋才」論と決定的に違う、と筆者は言う。

第九章［Morality and Religion］では、杉浦における道徳と宗教の関係が分析される。ところで杉浦がイギリス留学中に影響を受けた進化論は、キリスト教と対立状態にあった。杉浦はいわゆる「ビクトリア朝期の信仰の危機」を体験した。そして杉浦は物理的法則を人間の行動に適用して倫理を説明してみようと試みた。杉浦は、「人間の處世の大道も、物理上の大原則に支配されぬことはない」という認識に基づいて、「人間の處世」に「物理の定則」具体的には「エネルギー保存の法則」と「波動理論」を適応し、「人間の處世」を律する道徳を科学で基礎づけた。杉浦は「仮りにこれを『理学宗』といふ名称で主張した」と言う。

第十章［Scientific Morality］では、この、杉浦独特の道徳論＝「理学宗」が分析される。「人事も物理の定則を離れず」と考える杉浦は、「人事」に「物理の定則」具体的には「エ

ネルギー保存の法則」を適応する。杉浦によれば、原因のない結果はないのであるから、「善因には善果を得る」という形でエネルギーが保存されていく。そして杉浦は、万世一系の皇統が存続する日本では、皇室が一番強いエネルギーの源であるとして、結局天皇制を正統化することになった。また、個人や国家の栄枯盛衰は「波動理論」で説明される。では、「波動理論」から見て皇室の衰退はあるのかないのか、杉浦に即して追究してほしかった、と評者は考える。

第十一章［Confucian Rationalism］では、杉浦がともに強い影響を受けた日本的儒教と「理学」とが分析される。第一章で分析されたように杉浦の基礎的素養は儒教であった。帰国後の杉浦は、留学体験で獲得した「理学」をもって『易経』を初めとする諸経書を「物理の法則」で合理的に説明しようとした。杉浦によれば、『易経』は「エネルギー保存の法則」とその結果として起こる「波動理論」に基づく書物であった。従って、杉浦は、『易経』を経験に基づく法則的予測を行う「理学」と同じものと見做した。こうして『易経』を手本として儒教的合理主義が西洋近代の科学的合理主義によって再解釈され、近代化の促進要因とすることが企図された。

第十二章［State］では、杉浦における国家と個人の関係が分析される。杉浦は、「最大幸福」の追求という功利主義的原理から、国家と個人の調和を図ろうとする。杉浦によれば、「人は社会的の動物」であるから、「他ヲ利スルノ心ナケレバ、到底最大幸福ヲ得ル」ことができない。また杉浦によれば、「自愛」と「愛国」は相重なるものであった。そして日本の国家は、杉浦にとって、「万世一系の皇統」のもとに「各個人が其個人的利益を後にし国家的利益の為めに結合」しているものであった。ここには、個人の幸福に優先する国家の存在がある。これが、杉浦の言う、ナショナリズムと個人主義の調和であった。

以上の分析を踏まえて、終章［Conclusion］では、日本の近代化の中で杉浦の思想がまとめられる。筆者によれば、杉浦の思想は一つの詩に象徴的に集約される。

「敷島の大和心を種として、読めや人々異国の文。」

以上概観したように、筆者の杉浦重剛研究は、それまで部分的にしか研究されてこなかった杉浦重剛を、彼の留学体験がその後の思想展開に与えた絶大なる影響に着目して、全面的に検討し、従来にない杉浦重剛像の構築に成功している。筆者の分析は、杉浦が影響を受けた師の学問内容、当時の思想的潮流、さらに同年代の思想家との比較検討にまで及んでいて、筆者の学識の深さが伺えるだけでなく、論文そのものが説得的になっている。

また、本論文は、ごく一部に推敲を要する部分が残っているが、全体に明晰で流麗な英文で書かれている。しかも、様々な日本語の文体（擬古文、韻文、漢文、俗語など）が的確に英訳されて引用されており、筆者の日本語運用能力と資料処理能力の高さが証明されている。

以上のことから、審査委員一同は、本論文が博士（国際学）の学位に値する業績である、という結論に達した。